

中国女文字—2015年の実際

遠藤 織枝

1. はじめに

中国女文字—現地では「女書」^{にゅうしゅ}—については、最初の記事の本誌14号(1993)に「中国女文字紹介」として寄稿して以来、たびたびその調査報告を寄稿してきた。26号(2005)に「中国女文字の最終局面」と題して陽煥宜⁽¹⁾の死を報告し、30号(2009)の「庶民の自伝に描かれた女性像—中国女文字で書かれた自伝から—」で、女文字で書かれた伝記の価値を紹介して以後は、調査で新事実が発掘されることもなくなり、報告を控えてきた。本稿では、1993年に現地を訪ねたときから現在までの伝承者の推移と、現地の女書園(「生態博物館」とも呼ばれる)の「訓女詞」を例にして女文字の現状を報告する。なお、文中で、この文字のことをいうときは遠藤側のものとしては「女文字」の語を使うが、現地の文献や書き手などに関するときは「女書」の語を使う。文中人物の敬称は省略している。

2. 何艶新との出会い

1993年、清華大学の女書研究者趙麗明に案内を依頼して、湖南省江永県の現地を初めて訪ねたとき、自分の思いを女文字で書ける伝承者は陽煥宜1人であった。そのとき、80年代から研究者の求めて多くの女書資料を残してきた高銀仙がなくなったのは1990年、同じく多くの作品を残した義年華がなくなったのが1991年と知った。2人の伝承者が没して2年しか経っていない、探せばまだ伝承者は見つかるかもしれない、と思った。そして、同時に、この文字に非常に興味をひかれるが、中国語もできない、文字学・歴史学の専門でもない者でもこの文字に関われるとしたら、伝承者を探して、この文字の成立・使用者・使用範囲・伝承方法などを調査する社会言語学的方法しかないだらうと考えた。

1994年は、探せばまだ見つかるかもしれない女書の伝承者を探すことを目

標にして出かけた。村々を聞き歩いているうちに、何淵村で運よく巡り会えたのが1939年生まれ⁽²⁾の何艶新であった。村で高齢の人たちに、この村に女書のできる人はいないかと尋ね歩いているとき、呉蘭玉という50代の女性が「書ける人がいる！」と言って連れて行ってくれたのが何艶新の家であった。

突然の訪問に驚き、緊張した何艶新は、初めのうち女書は忘れた、知らない、何も書けないなどと言い張っていた。何歳のころ習ったか、どうやって文字を習ったか、祖母はどんな人だったかなど少しずつ聞いていくうちに、急に「書いてみる」と言って遠藤の持つ紙とボールペンを取り上げた。現地で伝わる数え歌を1番から1句歌ってそれを書き、2番目を歌ってそれを書くというふうに、順番に書いていった。思い出せない文字を同行の趙麗明に助けられながらで時間はかかったが、ついに10番まで歌って、それを女書で書き終えた。不揃いな拙い文字であった。

何艶新は8歳のころ祖母から、歌を1句歌い、その女文字を書くという伝統的な方法で文字を教わった。この訪問をきっかけにして、練習を再開し、徐々に文字数も増え、字形も整ってきた。その後95年と96年には春と夏の2度ずつ訪ねた。その復活の様子を記録しながら「なんでもいいから思ったことを書いてみて」と紙とペンを置いて帰国し、次の訪問でその成果を確かめるということを繰り返していた。きわめて記憶力のいい何艶新は祖母から教わった長い歌をたくさん覚えていて、それを正確に再現することができ、また、自分の思いを歌にして作ることもできるようになった。2年後には遠藤(1997)で報告した長文の「自伝書」が書けるまでに復活した。

初めて出会ったころ、何艶新は6人の子どものいちばん下が小学生で育ちざかり、夫が病気がちでその入院費用がかさむなど、極度に経済的に困窮していた。夫の入院費を捻出するために牛を1頭売ったとか、娘の学校もやめさせなければならないなどとも言っていた。

訪ねるたびに病院に夫を見舞い、娘の学校だけは続けさせるようにとわずかな見舞金を置いてきたりもした。1997年に夫を亡くし、農作業をする人手を失って、ますます困窮していた。今から思うと、遠藤はこうした何艶新にとって非常に辛い苦しい時期に彼女と出会い、その女文字の復活を促してい

たことになる。そういう時期だったからこそ、彼女自身も、従来の女性たちが苦しみと悲しみを綴ったと同じような心境の歌を作ることが可能であった。その最も辛い思いを女書で書き、その女書を書くことで慰められ励まされてきた。何艶新にとって、女書は従来の女書が女性たちに果たしてきたと同じ役割のものであった。

後に何艶新は、遠藤が読んでくれると思ったからそのときの気持ちを思うままに書けた、そうでなかったら自伝は書かなかった、と言った。90年代後半、女書はまさに消滅直前の時期にあった。日常生活の中で、女書が読み書きされる場はすでになく、女書で思いを書こうとする人も書ける人もいなくなっていた。読んでくれる人がいなければ当然書く気になれない。不幸な時期ではあったが、たまたまそこに遠藤がいて、女性史的に見ても価値のある何艶新の自伝が生まれたのは幸いであった。1歳半で父親を地主に殺されたことから苦難の人生が始まり、望まない結婚を母親に強いられ、結婚後は夫の暴言に悩まされるという半生。それを伝統的な慣用句を修辞法として巧みに読み込んで歌い上げた202行2828文字に及ぶ長い自伝は、その心情を訴えて迫るものがある。少し前の女書の時代の女性たちと同じ悲哀と苦悩が切々と伝わってくる。こうして2000年ごろまでは、家事と子供の教育と農作業に追われながら多くの作品を残してくれた。

3. 何静華の女書習得

何静華は、女書の伝わらない地に育ち、娘時代も全く習ったことはない。今でこそ、伝承者の代表として、世界各地に出向いているが、その伝承の質は何艶新とは基本的に異なる。何艶新は思いを伝える文字として祖母から習ったが、何静華は現地の文化遺産として文字を習得した。そして、そのきっかけは遠藤の調査に協力したことにあった。1997年の夏、遠藤は何艶新の女書の文字力の調査を試みた。何艶新は知っている歌は書いて、その文字数もわかるが、そのほかに彼女の知らない歌も聞いて書けるなら、その文字数は増えるであろう。そのため、現地に伝わる古い歌をたくさん知っている人に歌ってもらいたいと考えた。適当な人を探してほしいと頼んだところ、

歌をよく知っていて、地方のテレビにも出演したことがあるという何静華が現れた。2日にわたり、ホテルの部屋で何静華に古い歌を歌ってもらい、その歌を何艶新に女書で書き取ってもらうという調査をした。

翌年は同じ調査を北京で行った。現地へ行くには煩雑な入境許可を得なければならず、時間もかかる。2人に北京に来てもらう方が効率よく調査できるとのアドバイスを受けた結果である。北京のホテルで、何静華に、だれにも気兼ねせずに歌ってもらい、それを何艶新に書き取ってもらうていた。そのホテルで昼食をしているとき、何静華が食堂の白い紙ナプキンに何か書いたものを持ってきた。女書を書いたけど正しいかどうか見てほしいという。やわらかい紙に鉛筆で書いた文字は、ふわふわして落ち着きの悪い字体ではあったが、一見して美しい女書であることはわかった。「どうしたんですか」と聞くと、去年遠藤が帰ってから、遠藤らの残したコピーを拾い集めて真似して練習したのだという。「それはすごい、こんなにきれいに書けるようになったのはすごい」と手を取り合った。何静華は1940年生まれ⁽³⁾、68歳にして女書が習得できる例としても貴重だった。

それ以来、何静華はますます練習を積み、当時現地で最もよく女書を知る専門家であった周碩沂⁽⁴⁾のもとに通って練習し、書ける文字数も増えた。2年後には、歌を作ったと言って持ってきた。それは、この地の女性たちが夫を亡くした悲しみを12の月に分けて歌う「寡婦歌」を下敷きにして作ったものであった。「寡婦歌」に何静華が息子を亡くしたときの悲しみを重ね合わせて作ったのだが、「寡婦歌」をよく知っている人であれば、その中の時期や状況を自分の場合に置き替えればできることで、そう難しいことではない。

4. 伝承者としての何艶新と何静華

新たな伝承者何静華が精力的に活躍を始めると、それに押されて何艶新の影は薄くなった。何静華は積極的に文字を習得し、もともと知っているたくさんさんの歌をその文字で書くようになった。何よりも何艶新と何静華の生活環境の差が2人の力関係を決定づけた。何艶新は県の中央の市街地からバスで1時間ぐらい離れた農村何淵村に在住、何静華は江永の町の中心部、県政府

の建物から10分ぐらいの所に住んでいる。何艶新は寡婦で、長女は嫁ぎ、息子たちは都市に出稼ぎに出て家にはいない。家事から農業からすべて背負っている。そして今は出稼ぎ先に戸籍のない孫が戻ってきて地元の学校に通っているために、その孫の世話までしている。

何静華は夫が小さな工場を営み、経済的には全く困ることはなく、家の1室を女書教室に開放できるほど余裕のある家に住んでいる。

また2人の性格も対照的で、何艶新は派手なことは嫌いで内向的、何静華は、サービス精神旺盛で、頼まれたらだれにでも何でも書く。何艶新は、祖母から習った女書こそ本物だと考え、時代に合わせて新しく装飾を施すことはいけな事だと考えている。そのため書道のように筆で大きく書くことはしたがる。何静華は、きれいな文字がいいと考えて、曲線の多い書体で彼女流に装飾を施して「美しい」文字を書く。祝い事のときには、赤い墨で大きく祝いのことばを書いたりする。何艶新は赤い文字などありえないと言うが、県政府は宣伝になるので赤い大きな字の方を喜んで取り入れる。

県政府は外部からの来客に書いて見せるとき、近くの何静華を呼んできて書かせる。国内の郷土文化紹介のイベントや、海外の女性文化をテーマとする会議やシンポジウムなどには何静華を派遣して、文字を書かせる。2012年4月には「第3回国連の中国語の日」に参加するために、湖南省の文化庁・永州市宣伝部代表などとニューヨークへ行ってきたと、何静華は誇らしげであった。

女書の研究者は何艶新を伝統的な文字を伝える最後の伝承者として重用するが、観光誘致に力を入れる商業的・政治的場面では何静華にスポットが当たる。県だけでなく湖南省の伝承者として認められるようになり、さらに現在では国家級の伝承者として、認められるに至っている。

5. 現地政府の女書保護策

2003年県政府は、「女書伝人」という称号を伝承者に贈ることにした。その対象は陽煥宜・何艶新・何静華・胡美月・義遠娟の5人。胡美月は高銀仙の孫娘だが、祖母が教えようとしたときは、興味がなくて習わなかった。が、

祖母の没後、祖母の文字が価値があると知り、孫として祖母の文字を残さなければいけないとの使命感を持つようになった。祖母の文字を手本に練習し、簡単な歌なら作れるまでになっている。現在は女書園で観光客に説明したり文字を教えたり、また、県が主催する女書講習会などでも教えている。その文字には、祖母の文字の素朴な味わいが残っている。

もうひとり、義遠娟は高銀仙の孫の妻であるが、遠藤はこの人が書くのを見たことはない。どの程度書けるのかわからない。

県の女書伝人の選定基準は、県書記の張愛国によると、「昔からの女性の歌が歌える、この文字が書ける、読める、歌が作れると周囲の人が認める人」だという。この伝人に対して月額20元が支給されることになり、金色の紙に女書伝人と書いた立派な認定証が5人の家に飾られることになった。20元の価値について、何艶新は「このブドウを買ったらなくなってしまいうぐらい」と大きめの2房のブドウを見せて笑った。

2004年に、陽煥宜がなくなった。娘時代にコミュニケーション手段として実際に女文字を使った最後の伝承者が没して、趙麗明（2009：100）は、「この老人の死を境に、女書は自然生態時代にピリオドを打ち、ポスト女書時代に入った」とした。

遠藤（1996）は何艶新の文字力を知るために、陽煥宜・高銀仙の文字と比較してその結果を伝えている。3人が女書で書いた同じ故事の文字づかいを比較したものだが、何艶新の文字力はほぼ高銀仙に近く、陽煥宜よりはるかに正確であることがわかった。そのほかに、祖母から習った歌や文字をよく記憶していること、祖母の文字こそが女書だと信じていることなどを理由に、遠藤は何艶新までを本来の女書の時代と考えている。

2015年9月現在、県の認定した承者は以下の6人で、県は月に200元を支給している。

1. 何艶新（10歳の時祖母に教わる）
2. 何静華（1998年から書き始める）
3. 胡美月（高銀仙の孫）
4. 周恵娟（周碩沂の妹）

5. 蒲麗娟（何静華の娘）

6. 胡欣（胡美月の生徒）

このうち、何静華は国家伝承者として年に10000元、胡美月は省の伝承者として年3000元を支給されている。先の5人の伝承者のうち、陽煥宜は亡くなり、義運娟もあまり書けないとして外された。新しく伝承者に認定されたのは周恵娟、蒲麗娟、胡欣の3人。周恵娟は周碩沂の妹で、兄が書いているのを見ながら習得した。線の太い兄に似た文字を書く。歌は昔の歌に似せた歌なら作れる。蒲麗娟は母親の何静華から習った「美しい」文字を書く。母親と同様派手好きで積極的な性格は、県としても貴重な存在である。北京オリンピックのときには、北京に出向き、各地の文物紹介のコーナーの湖南省代表として、女書を書いてみせるパフォーマンスを演じた。

胡欣は20代のいちばん若い伝承者である。胡美月から文字を習った。師の胡美月の、祖母譲りの素朴な風合いを残した文字に比べて、教え子の文字は、やや線に誇張が加わり伝統的な文字よりも「美しく」なっている。声がよくて歌もうまいので、各地のイベントに女書の代表として出かけている。簡単なことなら思いを歌にして表現することもできる。

県政府は、インターネット上で世界中のさまざまな文字を収録し閲覧している UNICODE への登録を申請している。最初2007年に申請したときの文字リストは趙麗明が作ったもので、それには文字の配列や文字の選定に矛盾が多かった。そのため、文字の UNICODE 登録の適否を決める International Organization for Standardization (ISO) の会議でたびたび修正が求められていた。申請してから9年目の2015年10月19～23日に島根県松江市で開かれた ISO の会議で、いくつかの条件をつけられながらやっとのことで採択されることが決まった。

現地のポスト女書時代の書き手たちが、奔放に字形を変えたり新たに文字を作ったりすることになっても、女書時代の文字の形は UNICODE 上で残ることになる。

たという蒲麗娟（何静華の娘）に聞くと、『訓女詞』は母が作った。それを自分が書いた」と答えた（2013年11月2日）。何静華にも尋ねたところ「自分で独自に作った、三朝書⁽⁵⁾ 風に作り上げた。孫娘が結婚するとき書いて持たせようと思った」（同日）とのことであった。

この歌の漢字訳から日本語訳（遠藤粗訳+李奇楠補正）したものを以下に示す。

母が娘に教えたこと	（左から続く）	言い争いや口答えもせず
まず第一に貞淑を守りなさい		減らず口や、きつい言い方は能
父と母には孝行を尽くし		がなく
兄弟姉妹は睦まじく		言いたいこともいい過ぎず
塩・油・米・薪みな大切に		言って悪いことは言わないで
家業を興してよく働き		糸繰り機織り手仕事みなできて
金襴緞子は身に着けず		刺繍の針糸手放さず
粗末な木綿で身を整え		他家に嫁いで良い嫁となり
立つも歩くもしとやかに		里の娘時代と比べずに
行儀ふるまい穏やかに		眠くてもお日様とともに起き
女は地味な装いで		夜は燈火がつくまで休まずに
人と話すに礼儀あり		老を敬い幼を慈しみ家を保ち
穏やかな声でやさしく話し		夫の言はすべて重んじ
行くも歩くも気を遣い		娘は母の教えを心に刻み
小声でつましく歯を見せず		母のことは一言も忘れず
人と優しく接して大声を出さず	（右へ続く）	巳丑の年盛夏 蒲麗娟書

一瞬、江戸時代の女訓書⁽⁶⁾ か貝原益軒の女大学⁽⁷⁾ が再現したかと疑うような、儒教的色彩の濃い女子を教えさす歌である。書かれたのは「巳丑の年」とあるから2009年である。これまで、いくつかの女書で書かれた資料を読んできたが、それらの中に、こうした女子教育的な歌は見たことがなかった。三朝書の歌の中に、婚家の人にやさしく尽くすようにとさす句が混じ

ることはあるが、これほど真っ向から女に教えさす目的の歌はない。

21世紀の今、こうした儒教的な女子教育の歌が女書の博物館ともいべき女書園に大きく掲げられているのをどう理解すればいいのか、その意味を考えあぐねていた。

2015年10月20日、上述のISOの会議で来日した、趙麗明、県の前の女書管理センター部長で今は婦女連（中華全国婦女連合会）の県の主席である劉忠華、伝承者胡欣の3人に聞いてみた。以下遠藤の質問Qへの答えである。

Q：「訓女詞」のような歌は昔の女性たちの作品の中にあるか。

趙：ない。私の収集した作品を全部収めた『中国女書合集』5冊中にはない。この5冊は第1集から第4集までは亡くなった人の書いたもの、第5集は生きている人だが、祖母から習った何艶新に限った。ここまでが女書の時代⁽⁸⁾で、これ以降はポスト女書の時代に入っている。ポスト女書の伝承者は漢民族・漢字の影響下にある。周碩沂の作品には「訓女詞」のようなものがあつた。周の家は、漢字をよく知っている知識人の家だつた。娘が結婚して出ていくとき漢字で書いた女訓のようなものを持たせるような家だつた。周はその女訓のようなものを女書で書いたことがある。何静華は周に女書を習つたので、周の影響を受けている。その影響で孫娘が結婚するときに作つたのだと思う。「訓女詞」は何静華、つまりポスト女書の人の作品で、現在の伝承者の文字も作品も、もうコントロールできなくなつてゐる。

Q：その作品を女書園のホールに大きく飾つてあるのは、昔の女性が作つた歌だと思われような誤解を招かないか。

劉：女書は文字だけではない。女書は女書文化の中の一環である。今の伝承者の作品も女性文化全体の一部として飾つてある。だれがいつ作つたかなど、下に説明がつけてあるから、誤解される心配はない。

Q：「訓女詞」の考え方についてどう思うか。男尊女卑の思想ではないか。

趙：中国では価値観が混乱して、道徳の一線をどこに画すべきかがよく分からなくて、西洋的価値観の浸透によつてもたらされた問題の出現に

迷っている人がいる。伝統回帰によってその解決の方法を見つけようとする人もいる。男尊女卑もいいという人も出てきた。しかし、それは一部分にすぎない。昔に戻ろうとしても戻れるものではない。社会背景が違ってきているから。

劉：男尊女卑というような大げさなものではない。女性が家のことをきちんとし、父親や夫に従うのは、当たり前なことだ。自分は外ではリーダーの立場であっても、家では大事なことを夫に決めてもらい、それに従っている。

Q：若い女性は「訓女詞」をみたら反発しないか。

胡欣：私は、この歌はいいことを言っていると思う。いい内容のことを言っていると、言って、「訓女詞」の内容を写し取っていく女性はけっこういる。

Q：毛沢東は天の半分は女性が担うと言っていた。そういう考えと、「訓女詞」は矛盾しないか。

劉：毛沢東のことは政治の問題である。一般の人は、政治は政治で自分たちの生活とは関係ないと思っている。

趙：江永県は田舎だし、田舎にはまだ古い考えが残っている。

3人とも、この歌の内容について全く違和感を持っていない、それどころか好感も持っていることがわかった。この歌の意味について、今まで意識したこともなかったと劉主席は言った。特に婦女連の県の主席の発言としてそれでいいのかなど疑問はいくつも残ったが、意識してもいないと言う劉と、問題視する遠藤とのずれの大きさに話を続ける気力も失せた。

東京に戻って、日本語教師をしている中国人女性Lに聞いてみた。Lは「訓女詞」は現代人の考え方からみると全くおかしい、男尊女卑そのものですと言った。

なお、2015年7月に何艶新に「訓女詞」についてインタビューした⁽⁹⁾結果をまとめると以下ようになる。

「訓女詞」は何静華が全く独自に作ったもの。その内容は、自分の娘が夫の家に入ったら、夫の両親を敬えというもので、それほど趣のある内容ではない。私の祖母も母もこうした内容のことを言って私に教えようとしたことは一度もない。江永県宣伝部は、私にこの歌を学ぶように頼んできたが、私は率直に、この歌は現在作られたもので伝承されたものではないと答えて学ぶことを断った。宣伝部は何静華と、彼女の書くものを重要視している。それというのも、何静華が国家的伝承者だから。

はからずも、何艶新の口から、「訓女詞」を新たな伝承として女書伝承者に学ばせ書かせようとする宣伝部の意図が明らかになった。前の宣伝部長の劉の無意識よりもっと危ういところに事態は進んでいる。

「訓女詞」の現代的意義は、現代中国女性の生き方と密接な関連があり、地域差や民族差、世代差など複雑な問題が絡むので、ここでは論じる余裕もないが、以下に中国女文字で書かれた歌であることに焦点を絞って考えてみたい。

女書の時代の女性たちが女書で書いたものは大きく分けて2つある。1つは三朝書群で、結婚によって別れなければならない母と娘、結交姉妹⁽¹⁰⁾、叔(伯)母と姪、などの間で交わされた歌、もう1つは、上述の何艶新が1997年に作ったような自伝である。

「訓女詞」のような、女性の生き方に対する教訓や忠告は、三朝書の中にもみられるが、三朝書は嫁ぐ娘に贈られるものなので、その忠告は、嫁ぎ先での振る舞いについてのものに限られる。「訓女詞」のように娘の立ち居振る舞いから、働き方・家族への配慮・ものの言い方・親や夫への服従まで、娘の生き方すべてに対する忠告ではない。

三朝書については遠藤(2002:151-180)に詳述しているが、その内容はどの三朝書でもほぼ決まっていて、①書き始め、②嫁ぐ娘と別れる喪失感、③楽しかった日々の回想、④嫁ぎ先の人への詫び、⑤娘をよろしくと言う頼み、⑥娘の幸せを祈る、⑦女に生まれた不運を嘆く、⑧望まぬ結婚を強いらられるような天の制度を恨む、⑨嫁ぎ先での振る舞いに対する忠告、⑩里帰り

を待つ、といったものである。各三朝書はこれらの話題をいくつかずつ取り入れて1冊にまとめあげている。

「訓女詞」と共通するのは、この⑨の話題で、いくつかの三朝書に書かれたこの部分を引用してみる。

[1] あなたは遠い目で見てください

他人の家に嫁いても泣いたり悲しんだりせず
木や花は自分の庭を離れても
相手の家に落ちつけば日が当たります（国会図書館蔵 K-10⁽¹¹⁾）

[2] 娘の日はもう終わり

安心して嫁いで礼儀正しく振舞って
愁いを払って皆さんに仕え
いつも悩んだりしないで
婚家は実家にいるのとは違う
気持ち抑えて親に仕えて（遠藤2002：163）

[3] おしゅうとめさんは礼儀ある人

姉さん おしゅうとめさんに比べて情理が薄いから
礼を身につけるまでゆっくり教わり
愁いを払って他郷に住んで
笑みを浮かべて皆さんに仕え
気を穏やかに他人と接し
ことば荒立てず礼を正しく（国会図書館蔵 K-9⁽¹²⁾）

親しいものに囲まれて穏やかに暮らした娘の日が終わって、娘が1人で飛び込んでいく嫁ぎ先での不安や嘆きを察した三朝書の送り手は忠告する。

「嫁ぎ先は実家と違って、いろいろ厄介なこともあるでしょうが、
心を乱さず穏やかに住むように、

笑みを浮かべて婚家の人々に仕えるように、
ことばを荒立てずに礼儀正しく仕えるように、
しなさい」と。

三朝書の中のハイライトは嫁ぐ娘と別れる悲しみであり、そうなった運命を嘆き恨むことである。男なら家を離れることはないのに、女に生まれたために、他家に嫁がなければならない、天の制度が悪いのだ、でもどうにもならないことで、嫁ぐ以上は、婚家に仕えた方があなたの幸せだ、という歌の流れの中で、その振る舞いに対する忠告もなされる。

ここには「訓女詞」のように頭から娘をさとそうとする意図も姿勢もない。また、その表現の仕方も違う。「訓女詞」はストレートに教えを次々に並べ立てるが、三朝書はそうはしない。悲しいことでも「遠い目で見るように」、知らないところでも「安心して嫁ぐように」「お姑さんも決して悪い人ではない」と優しく慰めながら歌う。そして「木や花は自分の庭を離れても相手の家に落ちついても日が当たります」と安心させようとする心遣いを巧みな比喩に託して伝える。こうした比喩は三朝書に多く使われ、その表現を豊かにし、送り手の深い心を伝えるのに大きな効果を上げている。「訓女詞」には、比喩はない。それよりも、「家業を興してよく働き」などまさに経済発展に邁進する現代中国らしい直截な表現であおりたて、何艶新のいうとおり「趣のある内容ではない」。女書の時代の女性たちの控えめな表現や、比喩に託す複雑な思いは「訓女詞」には全く見られない。「訓女詞」も女文字で歌を書くなら、せめてもう少し昔の女性の書いたものを学んでほしかった。

文字だけ借りて、現代の心を書いたのだというのは答えにならない。文字と心とは別というなら、今の気持ちは漢字で書けばいい。女書を使う以上は、その女書のもつ情感も機能も受け継いでほしい。

文字だけ借りる例として、女書で毛沢東の詩を書くことも現地では行われている。それが外部から来た人への県政府からのおみやげに使われたり、女書園で売られたりしている。

このことについて劉主席は「文化としての女書ではなく、ただの文字形式としての女書の機能を使って、毛沢東の詩を表現しているだけだ」と答えて

いる。「天の制度」で圧迫された女性たちが、なんとかして思いを伝えようとして作り出した文字が、もう一方の「天」ともいえる新中国建設の指導者、毛沢東の詩を表現するという大きな矛盾に、県の指導者は全く気づいていない。

現代人が、何か訴えたいとき、女書でなければできない訴えであるなら、それを書くのもいい。何艶新は学校で漢字を習ったが、女書で「自伝書」を書いた。彼女は言った。「こうした悲しい歌は漢字では書けない。女書があったから、悲しい辛い気持ちを書く気になった」と。女書でなければ書けないものを書いた彼女は、女書があったから救われた。

何静華が孫に言い伝えたいなら、漢字で書けばいい。漢字訳もつけられるほど、彼女も漢字はよく知っている。女書を使って、今の自分の思いをあたかも昔の女性たちが歌った歌であるかのように見せるのは罪が深い。何静華が作った歌だといくら説明してあったとしても、普通の人はその小さな文字は見ない。大きく書かれた女書の文字と漢字訳を見て、やはり、昔の女性は儒教的な思想を持って娘をさとしていたんだ、とあっさり理解してしまうだろう。

ところが、女書の時代の女性たちはそうではなかった。例外的存在と言えるかもしれない。儒教的思想に圧迫されて押しつぶされそうな農村の女性の間から、この文字が生まれたことを今いちど思い出したい。女書を作った女性たちは、ただ儒教的教えに従ってばかりはいなかった。女性には教育は必要ないとされて漢字も与えられなかった時代に、自らの思いを託した歌を表記する文字がほしい、ほしいからそれを作ったという奇跡は、儒教的支配に諦めていたら起こらなかったことだ。その束縛の中であって、わずかにでも自分たちの思いを解放したいという情熱を持つ女性たちがいた。そしてそれを実現した。

写真に示すように「訓女詞」は女書園の中心部分に大きく掲げられている。毛筆の美しい文字で書かれている。その内容は儒教の女子教育そのものである。儒教への伝統回帰を望む人がいてこういう歌を歓迎する人がいるとしても、それは女書の女性たちの思いや表現方法とは全く異なる。そうしたものをあたかも女書の後継者の書いた代表的な作品であるかのように大きく

掲げるのは間違いである。

何艶新は「祖母は小さい文字しか書かなかった。悲しいことを書く文字だと祖母は言っていた」といつも言っている。この文字はもともと、手のひらに乗るぐらいの冊子に、小さく自分たちの苦しみ・悲しみ・嘆きを書いて慰め合った文字である。女性はかくあるべしと、居丈高に歌って女性を押さえつける「教え」を書くための文字ではなかった。女性たちが、与えられた理不尽な運命を訴えて、悲しみを分かち合い、慰め合うために、作り伝えてきた文字が、21世紀の今、女性の自由でのびやかな成長を縛る道具にされていると知ったら、女書を生んだ女性たちの驚きと嘆きはいかばかりであろう。

注

- (1) 陽煥宜（1909～2004）。14歳の時、隣村の義早早の許に通って女書を習った。人に頼まれて書いたこともある。結婚後書くことはしなかったが、1990年、趙麗明と家族に勧められて再開した。2004年9月亡くなる直前まで、研究者・見学者の求めに応じて女書を書き続けた。
- (2) 最初会ったとき、何艶新は生年を1940年と言っていた。そのため論文などで1940生まれとしていた。ところが、2011年に来日した時、実は1939年生まれだとのこと。よって、それ以降1939年生まれとしている。
- (3) 最初、何静華は1940年生まれと言ったため、遠藤はそれを彼女の生年としているが、2014年に江永女書文化伝播有限責任会社が制作したカレンダーでは、何静華がその第1面に登場し、1934年生まれになっている。
- (4) 周碩沂（1924～2006）。1950年代から女書資料収集を始めたが、文革で下放され、集めた資料も焼き捨てられた。文革終息後資料収集と研究を再開し、現地で最もよく女書が読み書きできる女書の専門家となった。『女書字典』（岳麓書社2002）も編集した。
- (5) 娘が嫁いだ3日目に実家から食べ物・婚家への贈り物などと一緒に届けられた冊子。大きさや材質・体裁は一定して、歌は中の紙3枚6ページに書かれ、余りの紙の間には刺繍の糸などがはさまれている。
- (6) 室町時代から江戸時代にかけて出された、女子として身につけておくべき教養や、

起居動作言動についてのたしなみを教えた書物。

- (7) 江戸時代中期に、儒学者貝原益軒の『和俗童子訓』をもとにして作られたとされる女子教育用の教訓書。三従の教えや、立ち居振る舞い、言動などに関する教えを説いている。
- (8) 趙麗明は、趙麗明（2009）では、陽煥宜までが女書の時代でそれ以降はポスト女書の時代と言っているが、ここでは何艶新までを女書の時代と言ひ、前後に矛盾がある。
- (9) 2015年7月、鈴木英怜那（東京芸術大学4年）が、卒業制作の取材で女書の現地を取材旅行したいと相談にきたとき、遠藤は何艶新に会って話を聞くことを勧めた。その際、「訓女詞」についての質問項目を鈴木に手渡し、聞き取りをしてきてもらった。
- (10) 仲のよい少女どうしが姉妹の関係を結んだ「義理姉妹」。真の姉妹よりも親密な交わりを持ち、姉妹の誰かの結婚が決まると、その娘の家に結婚前半月前から共に住んで別れを惜しみ、歌を歌い合った。
- (11) 遠藤が2010年に国会図書館に寄贈した三朝書のうちの1冊。
- (12) 同上。

参考引用文献

- 遠藤織枝・陳力衛・劉穎（1996）「96春中国女文字現地調査報告」『文学部紀要』10-1 pp. 1-31 文教大学文学部
- 遠藤織枝（1997）「97年中国女文字調査報告」『ことば』18 pp. 56-107 現代日本語研究会
- 遠藤織枝（2002）『中国女文字研究』明治書院
- 趙麗明（2005）『中国女書合集』中華書局
- 趙麗明（2009）『「女書用字比較」の学術的価値』遠藤織枝・黄雪貞編著『消えゆく文字 中国女文字の世界』pp. 99-117 三元社

（えんどう おりえ）